

あとがき

平成21年度に『富岡製糸場のお雇い外国人に関する調査報告』を上梓して以来、12冊目となる『令和3年度富岡製糸場総合研究センター報告書』を刊行することができた。

今井の報告は、富岡製糸場で活躍した特色ある人々を中心に経営主体の変遷に沿って考察を行っている。前半部分では現代のヘッドハンティングのような形で雇い入れられた経営者や技術者に注目し、彼らが富岡製糸場のみならず日本の蚕糸業界で残した功績を中心に論を進めている。一方、後半部分では社会的分業が進む中、戦争による輸出途絶や生産力の衰退等を組織力で乗り越え、戦後の蚕糸業の復興に努めていった様子が述べられている。

結城の報告は、明治35年の燃料元帳を用いて富岡製糸場で使用した燃料について考察を行っている。施設に応じた多様な燃料が使い分けられていたことを確認する一方で、富岡製糸場では操業開始以来、高崎炭田の亜炭を使用したとされてきたが、常磐炭田の開発と鉄道網の整備により安価な粉炭が入手できるようになり、これらの燃焼に適したボイラーの導入に伴い汽缶室での亜炭の使用は明治33年までには終了したと結論づけている。

木内の報告は、「日本蚕糸界のエジソン」と呼ばれた御法川直三郎が開発した繰糸機に注目し、三井経営期の明治29年から片倉経営期の昭和17年にかけて富岡製糸場に導入された御法川式繰糸機及び多条機の変遷を辿ることを通して富岡製糸場の経営者たちと開発者である御法川直三郎との関係性を明らかにするとともに、富岡製糸場に現存する御法川式繰糸機について聞き取り調査の成果を踏まえて考察を加えている。

伊藤の報告は、社宅の居住者で組織し社宅相互の親睦を目的とした「社宅会」及び「社宅主婦会」の規約の比較検討から社宅主婦会を社宅会の後継組織と位置づけるとともに、各戸に回覧された昭和30年代の「社宅回覧」から生活に必要な電気、ガス、薪炭、水道だけでなく子どもたちの遊び場に関するルールや短期的な作業の応援依頼などを工場内に立地する社宅ならではの特性ととらえ、当時の社宅の暮らしについて明らかにしている。

最後に、令和3年に富岡製糸場の国宝東置繭所で開催したパネル展「渋沢栄一と富岡製糸場」のスピノフ企画として、研究ノートという形で、渋沢栄一が明治政府に出仕を始めた明治2年から尾高惇忠が富岡製糸場の初代場長を辞した明治9年までの期間の大蔵省及び民部省の組織の改編について確認するとともに富岡製糸場の所管省寮司等の変遷について整理することを試みた。

末筆となるが、本報告書が世界遺産登録の際にユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議から示された課題解決の一助となるとともに、多くの方にご覧いただき忌憚のないご意見を賜ることができれば幸いである。

令和4年3月

富岡製糸場総合研究センター 所長

結 城 雅 則